

溝口の塚古墳
恒川遺跡群倉垣外遺跡
市内遺跡

平成9年度市内遺跡緊急調査概報

1998年3月

長野県飯田市教育委員会

溝口の塚古墳
恒川遺跡群倉垣外遺跡
市内遺跡

平成9年度市内遺跡緊急調査概報

1998年3月

長野県飯田市教育委員会

序

飯田市は、自然的条件に恵まれており埋蔵文化財をはじめ多くの文化財を今に伝えています。これらは私たちの地域社会や文化を形作ってきた様々な証で、できる限り現状のままで子孫に残し伝えることが私たちの責務と考えます。しかし、同時に私たちはより良い社会やより快適な生活を求めていく権利も持っています。ですから日常生活の様々な場面で文化財保護と開発という相容れない事態に直面することが多くなっています。こうした場合、発掘調査を実施して記録として後世に伝えるという方法をとることがあります。

例えば、個人経営の水田において機械の導入により生産性を高めることを目的に実施する小規模な基盤整備事業や個人住宅の建築などはより良い日常生活を送るために認められるべき基本的な権利でしょう。けれども、これらの事業予定地が埋蔵文化財包蔵地内であった場合、事業を実施することで今まで残ってきた貴重な文化財が破壊されてしまう結果になりかねません。こうした場合、それぞれの事業に先立ち調査をして記録として残すことが必要となるわけです。ただ、これらの事業は利益の追及に関わらない性格のものですから、個人に費用の負担を求めるることは困難と判断し、飯田市では国・県の補助を受けて発掘調査等を行なっています。

現地調査の結果や整理作業の成果の概報として本書を作成しました。調査で得られた様々な事実はこれから地域史研究上で貴重な資料になるものと確信しております。

最後になりましたが、調査に当たり多大なご理解とご協力をいただいた地権者ならびに隣接者の方々、現地作業や整理作業に従事された作業員の方々ほか関係者各位に心からお礼を申し上げつつ刊行の挨拶とさせていただきます。

平成10年3月

飯田市教育委員会

教育長 小林恭之助

例　　言

- 本書は個人の行なう宅地開発・基盤整備等の開発行為により破壊される遺跡の記録保存を図るため、国・県の補助を受けて、平成9年度に実施した市内遺跡緊急発掘調査（遺構確認調査・試掘調査も含む）の概要報告書である。
- 本書の内容は、市内遺跡緊急調査のうち溝口の塚古墳の調査結果、恵川遺跡群倉垣外遺跡の遺構確認調査および市内各所で実施した試掘調査の結果である。
- 発掘調査等は飯田市教育委員会の直営事業として、地権者をはじめ多くの方々の協力を得て実施した。
- 調査組織は以下のとおりである。

(1) 調査團

総 括	小林 正春					
調査員	伊藤 尚志	佐々木嘉和	下平 博行	鳴海 紀彦	馬場 保之	
	福澤 好晃	山下 誠一	吉川 金利	吉川 豊		
作業員	今村 春一	牛山みきゑ	太田 沢男	金井 照子	木下 早苗	
	熊谷 義章	小島 妙子	小平不二子	小林 千枝	下澤 和央	
	下平由美子	瀬古 郁保	高木 純子	竹村 和子	竹村 定満	
	田中 薫	田中 博人	中平 隆雄	中野満里子	中野 充夫	
	中山 敏子	原田四郎八	福沢 幸子	福沢トシ子	藤田 浩明	
	正木実重子	南井 規子	森山 律子	柳沢 謙二	吉川紀美子	
	吉川 正実	米山 俊輔				

(2) 指導

長野県教育委員会文化財保護課
長野県埋蔵文化財センター

(3) 事務局

飯田市教育委員会博物館課
小畠卯之助（博物館課長）
小林 正春（博物館課埋蔵文化財係長）
吉川 豊（博物館課埋蔵文化財係）
山下 誠一（博物館課埋蔵文化財係）
馬場 保之（博物館課埋蔵文化財係）
吉川 金利（博物館課埋蔵文化財係）

福澤 好晃 (博物館課埋蔵文化財係)
伊藤 尚志 (博物館課埋蔵文化財係)
下平 博行 (博物館課埋蔵文化財係)
牧内 功 (博物館課庶務係)

5. 本書は調査員全員で協議の上、調査担当者がそれぞれ分担し文末に筆者名を記した。また、編集は吉川 豊が行ない、小林正春が総括を行なった。
6. 本調査の結果、出土した遺物および記録された図面・写真類は飯田市教育委員会が管理し、飯田市考古資料館で保管している。

目 次

序	i
例言	ii
目次	iii
1. 緊急発掘調査	1
溝口の塚古墳	
遺跡の概要	
調査の経過	
調査の結果	
まとめ	
2. 遺構確認調査	5
倉垣外遺跡	
遺跡の概要	
調査の経過	
調査の結果	
まとめ	
3. 試掘調査	9
I 古瀬平遺跡	
II 上の原遺跡	
III 山本遺跡	
IV 鬼釜遺跡	
V 中宮原東遺跡	

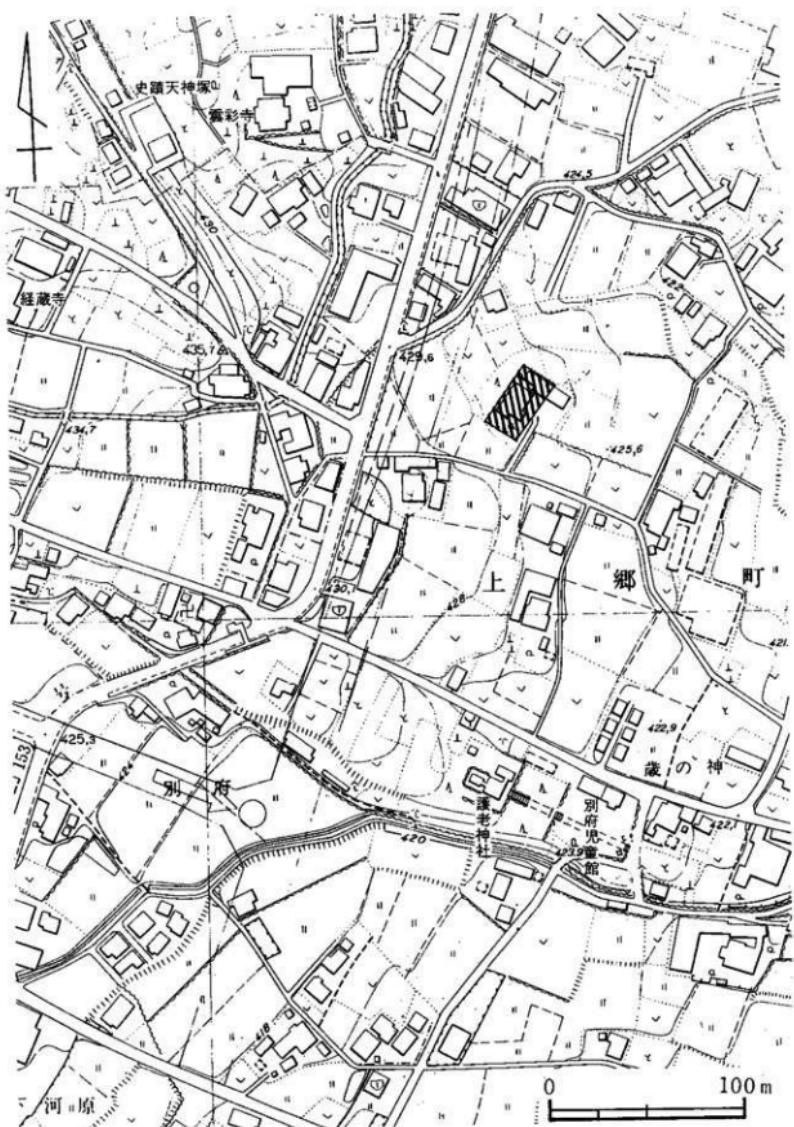


1 古瀬平遺跡
5 山本遺跡

2 恒川遺跡群倉垣外遺跡
6 中宮原東遺跡

3 溝口の塚古墳
4 上の原遺跡
7 鬼釜遺跡

溝口の塚古墳調査位置図



緊急発掘調査

溝 口 の 塚 古 墳

飯田市上郷別府1326-1

1. 遺跡の概要

上郷低位段丘の南端、松川を望む段丘上には古墳が点在する。なかでも雲彩寺古墳（大神塚）・番神塚古墳・溝口の塚古墳・宮の前垣外古墳は前方後円墳である。現在の栗沢川の川筋は、以前それとはかなり違っているものと見られ、これら4基の前方後円墳は同一段丘面に所在したことになる。

溝口の塚古墳は岡島国雄氏宅の裏で山状に盛土を残したものであったが、国道バイパスの建設用地にかかり、工事に先立つ発掘調査の結果、堅穴式石室を持つ前方後円墳であることが確認された。

2. 調査の経過

(1) 調査に至るまでの経過

一般国道153号飯田バイパスの建設に先立つ埋蔵文化財発掘調査が本格的に実施されたのは平成9年になってからである。岡島国雄さんの宅地が路線にかかったため、住宅はそれまで農地として使用していた場所へ移築された。専業農家である岡島さんは宅地だった場所をもう一度野菜畑として利用するため、深さ1m程度を耕作土に客土する計画を立てた。

計画地はバイパスの調査で前方後円墳と判明した溝口の塚古墳の東側であり、宅地造成で盛土は削平されたが、二重周溝が残っているものと見られる。そこで工事実施前に調査を実施することとなった。

(2) 調査の経過

もと宅地だった場所へ重機を入れ、造成土を除去した。用地のほとんどは周溝内に掛かり、黒色土が深く堆積していた。墳丘は削平され、地山と周溝の境には大きな石が並んでいた。

周溝の掘り下げはベルコンを使用して実施したが、地表から1.5mほどの深さがあり、時間が掛かった。

3. 調査の結果

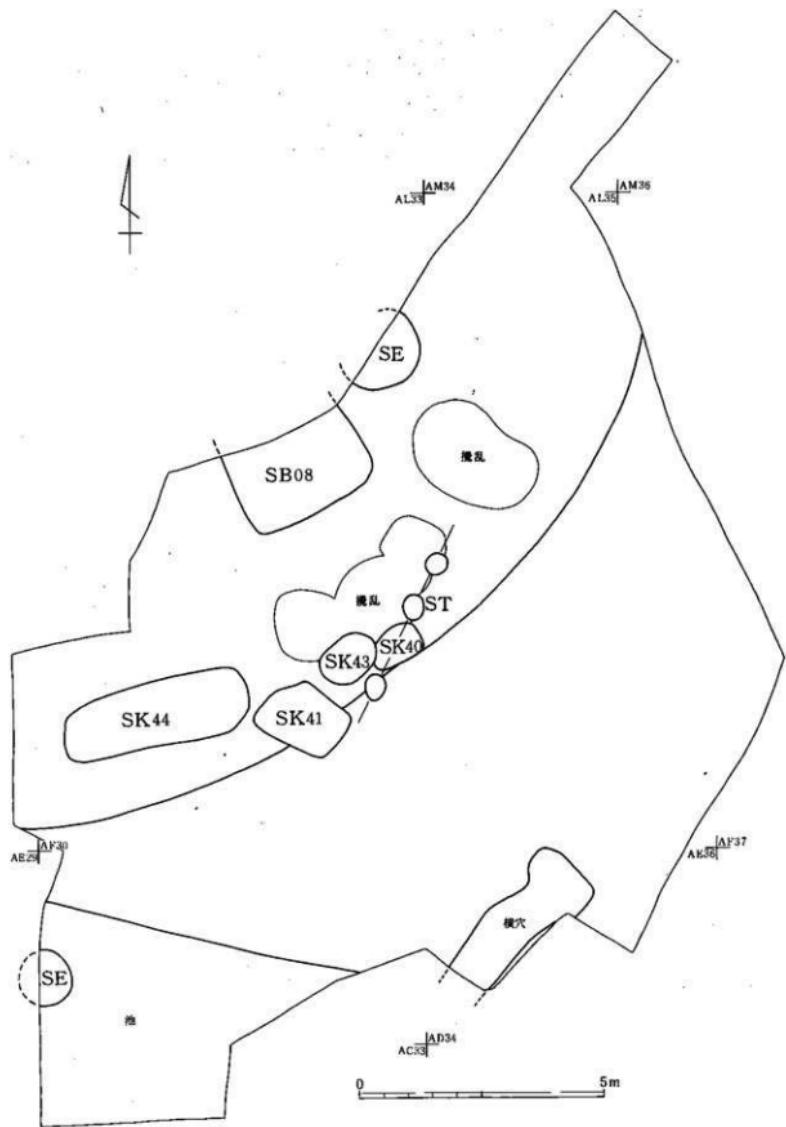
前方後円墳の後円部一部とくびれ部とみられる箇所が確認できたものの、一部に後世の擾乱があり、破壊されている箇所がある。古墳の規模は全長で約50m、後円部直径が約30mと比較的大きな前方後円墳である。後円部南側の葺石がやや直線的に並ぶところがあり、須恵器の甕の破片が出土している。時期的には5世紀後半と見られ、この古墳に属するものと見てよい。

周溝内からは埴輪が多量に出土しており、大部分は円筒埴輪の破片であるが、形象埴輪の破片と見られるものも含まれている。

また、中世のものと見られる長方形の堅穴が確認されたが、その箇所は古墳の周溝の内側に当たる。このことからこの古墳の盛土の一部は中世頃削平たものと判断できる。

4. まとめ

国道バイパスと今回の調査により、溝口の塚古墳が5世紀後半に造られた堅穴式石室を持った前方



溝口の塚古墳遺構分布図

後円墳であることが確認された。この古墳の主体部が確認され、石室から短甲をはじめとした武具がひと揃い出土した。飯田下伊那地方において、竪穴式石室が調査された2例目となった。この地方ではいくつかの短甲が出土したことになっているが、発掘調査において短甲が確認されたのは初めてである。

出土した鉄器類からこの古墳の被葬者を推測すると、この地方で行なわれていたと見られる「牧」の経営と深いつながりがある人に思い当たる。調査地に隣接するバイパス予定地に所在する宮垣外遺跡では馬を埋葬した土坑が3基確認されており、その内のひとつでは埋められたままの姿で一頭分の骨が出土した。今回の調査地でも擾乱の中からではあるが、馬の歯が出土しており、古墳や周溝墓の周囲に馬を埋葬するという行為があったと考えられる。それは多くの馬を所持しているからこそできる行為であったに違いない。

この段丘面ではこれまでに古墳時代の集落が確認されていないばかりか、宮垣外遺跡では周溝墓を中心とした墓が連続して確認されている。このことはこの地が居住域ではなく、墓域であることをしめしている。状況から判断するに、この墓域を形成した人々の生活の中心はこの古墳の東側に位置する高屋遺跡、南側に拡がる矢崎遺跡が有力である。

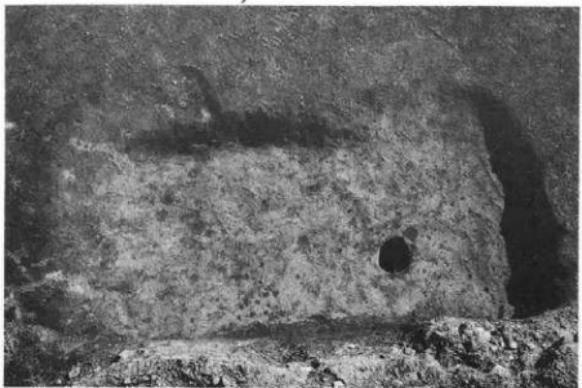
この古墳も他の多くの古墳がそうであったように、葺石が転落し周溝が埋まりはじめると、盛土が削られ平坦にされたものであろう。今回の調査の結果から削平された時期は中世と見られる。周溝の内側は本来ならば古墳時代の地表面の上に盛土があるはずなのに古墳時代の表土を切って中世の住居址が確認できた。このことは家を建てるために古墳を削したことの証拠といえよう。

当地方において古墳時代の古墳墳丘まで削平しての開発が行われるのは江戸時代後期以降が大半であるのに対し、本溝口の塚古墳は、長さ50mを越える前方後円墳であるにもかかわらず、中世段階に削平し、宅地等に利用されていることに大きな意味を見出すことができる。

この地は、大字名で「別府（べっぷ）」の呼称で知られているが、その地名がいつ頃から、またなにを意味するか具体的に示すものはない。大古墳まで削平した事実はその段階で強い政治的な働きかけのあった結果が想定される。この時代にこの地を統治していた武家集團等によるこの地を利用する姿の一環として本古墳を削平しての開発行為がなされた可能性が高いといえる。　（吉川　豊）

調査区全景





中世の住居址（部分）



重機による表土剥ぎ



作業風景

遺構確認調査

恒川遺跡群倉垣外遺跡

飯田市座光寺4609-8

1. 遺跡の概要

倉垣外遺跡は恒川遺跡群の南よりで、流田と恒川清水という湿地に挟まれた微高地上に展開する遺跡である。今までにも、国道バイパスや諸開発に先立つ緊急調査や重要遺跡囲確認調査等で何回も調査を実施した遺跡である。恒川遺跡群は奈良・平安時代に伊那の郡衙が置かれた場所であり、この地方の中心であったとされる。しかし、現在でも正庁の所在地が確定できず、郡衙の範囲も確実にはつかめていないものも、平成6年度の範囲確認調査で薬師垣外遺跡で正倉群が確認されたこともあるて、郡衙の中心は高岡1号墳に近い恒川遺跡群の北寄りではないかとの見方が強まっている。

2. 調査の経過

(1) 調査に至るまでの経過

恒川遺跡群倉垣外遺跡ではこれまでの調査により倉庫群と見られる掘立柱建物址の並びや役所で使用したものと見られる硯などの郡衙関連の遺物が確認されている。

以前（昭和63年度）に確認調査を実施し、銅鏡が出土した場所の隣で個人住宅を建設する計画が立ち上がった。前述のような状況を説明する中で計画の変更を求めるが折り合わず、工事実施日が近づいてきたため、県教育委員会文化財保護課の担当職員をお願いし協議を実施した。その結果掘削工事を伴う基礎部分のみで遺構の確認調査を実施するものとなった。

(2) 調査の経過

基礎部分の遺構確認調査ということで、ごく限られた範囲の調査になった。

ミニバッックにより基礎部分を検出面まで掘り下げて、作業員により遺構の分布状況の確認を行ない、測量には平板を使用した。

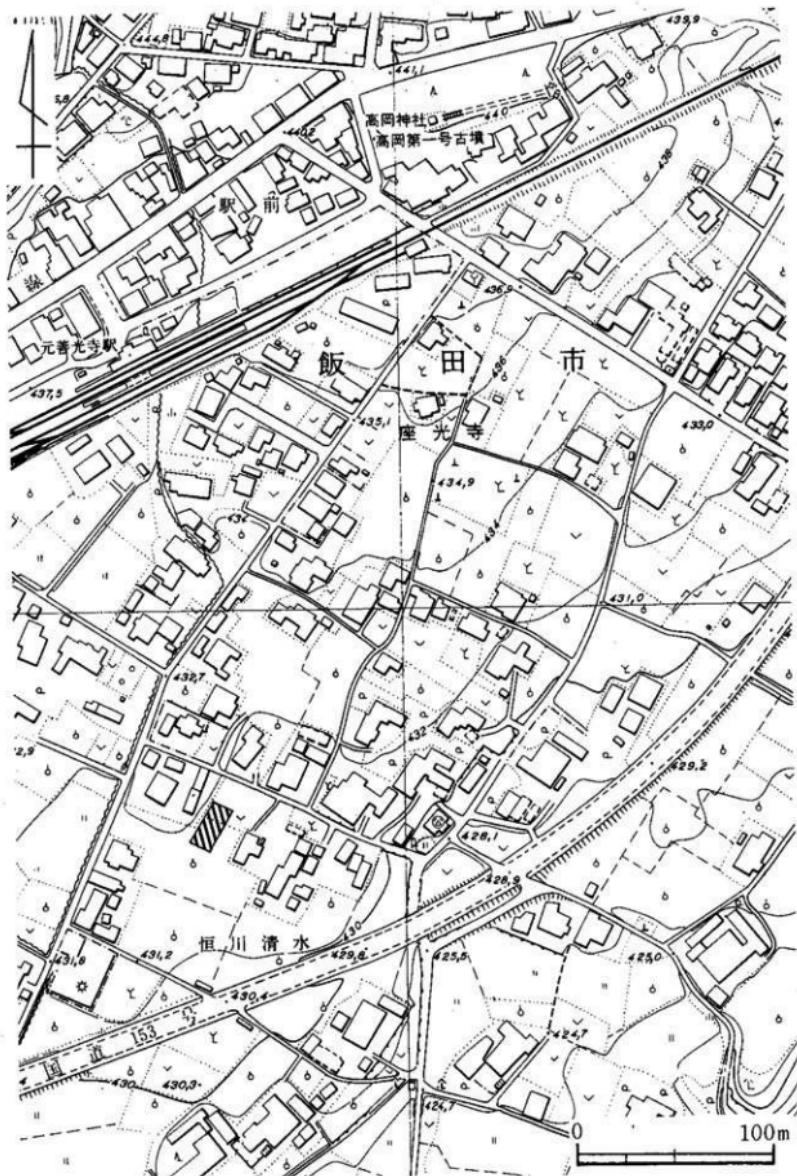
3. 調査の結果

基礎部分は8か所あり、範囲は約1.2m四方ほどしかないため、遺構の有無は確認できたものの性格まで詳細に把握することはできなかった。確認できた遺構としては空穴式住居址および掘立柱建物址である。（分布図参照）切り合いから判断するに住居址のほうが建物址より古いことがわかった。遺物で見る範囲では住居址は弥生後期から古墳後期程度で、建物址は奈良もしくは平安時代頃と見られる。

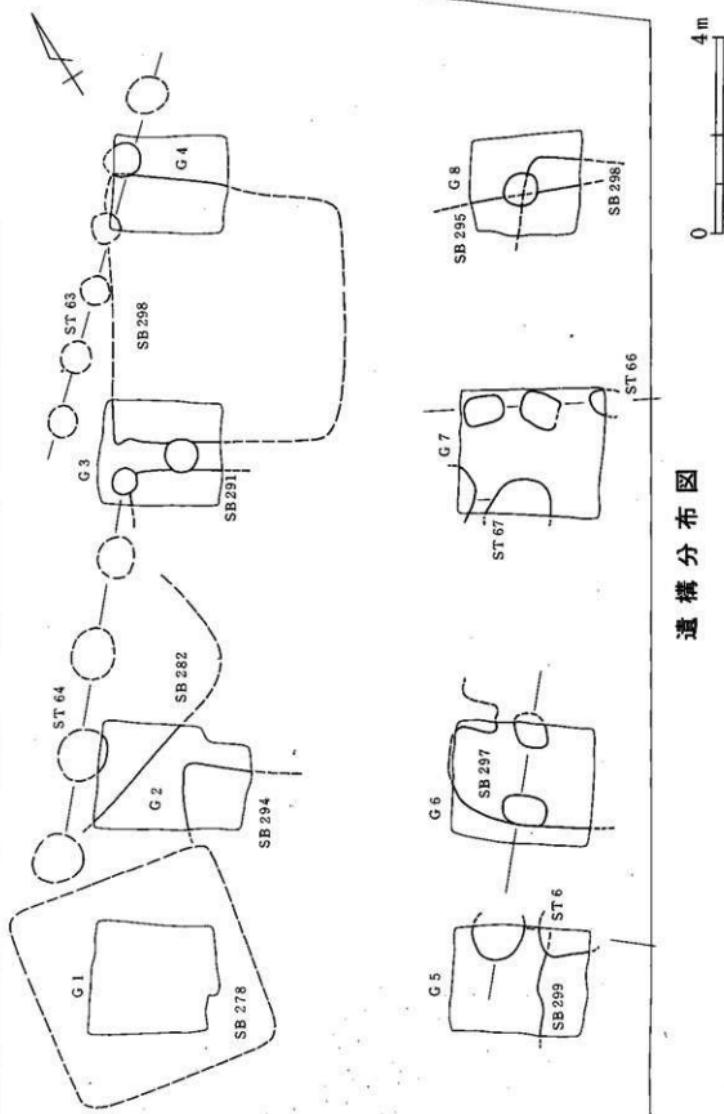
4.まとめ

昭和63年度の確認調査と今回の調査において得られた資料から、この倉垣外遺跡は恒川遺跡群の中でも比較的古い時代の居住区であったと見られる。弥生時代後期や古墳時代後期の住居址が比較的まとまって確認されている。それに対し、奈良・平安時代の遺構として確実に確認できたものは掘立柱建物址があるのみで、バイパスの調査や同地区で実施された緊急調査の結果からこれらの建物址は倉庫と見られる。したがって、この時代には郡衙域のなかでも南にあたり、倉庫群があった場所と見られる。（佐々木嘉和）

倉垣外遺跡調査位置図



遺構分布図





基礎部分掘下げ



検出状況



掘上げ状況

試掘調査の部

I 古瀬平遺跡

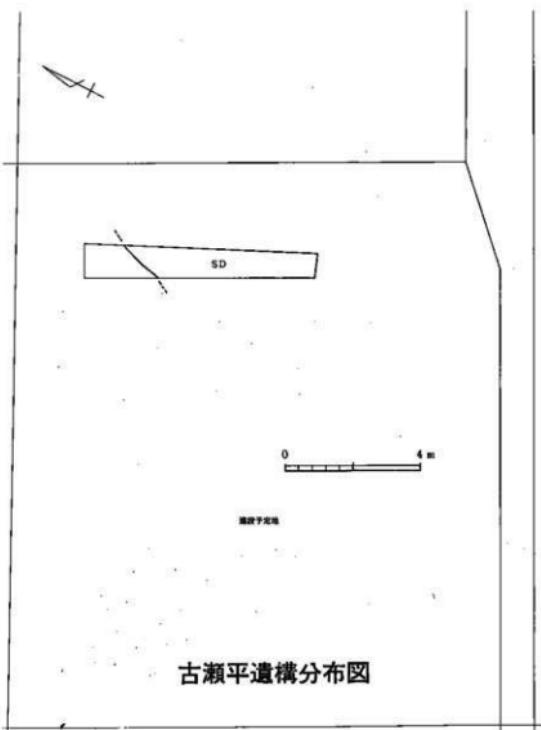
飯田市座光寺3532-16

位 置 J R 飯田線元善光寺駅の西で恒川遺跡群と接する場所であるが、恒川との境界を明確に示す地形的な変化は見られず、同一段丘面に所在している。そのため、古墳時代・平安時代の集落が広がっていても不思議ではない。さらには、北側にあたる上野段丘崖斜面では瓦窯址が1基調査されているが、まだいくつかの窯址が発見される可能性もある。

経 過 J R に面した空き地を盛土造成し、個人住宅を建設するものであった。一般住宅のため、規模も小さく、基礎工事も50cm程度の掘削で終了することであった。しかし、前述のような包蔵地であるため、工事実施前に地下の様子を確認する試掘調査を実施することになった。試掘の結果、遺構等が確認された場合は再度協議し、保護処置をとることを確認した。

結 果 建設予定地の北東部に幅約1m、長さ約7mのトレンチを設定し、重機により掘削した。遺構検出面（基盤）までには厚さ2.7mほどの土・砂の堆積があり、弥生時代から中世にわたる遺物も数点出土した。検出面では旧河川と見られる溝状の落ちこみが確認できたのみである。周辺には住居址等の存在も考えられるが、今回の工事では遺構等への影響もなく地中に保存されると判断し、発掘調査は不要とした。

(山下誠一)



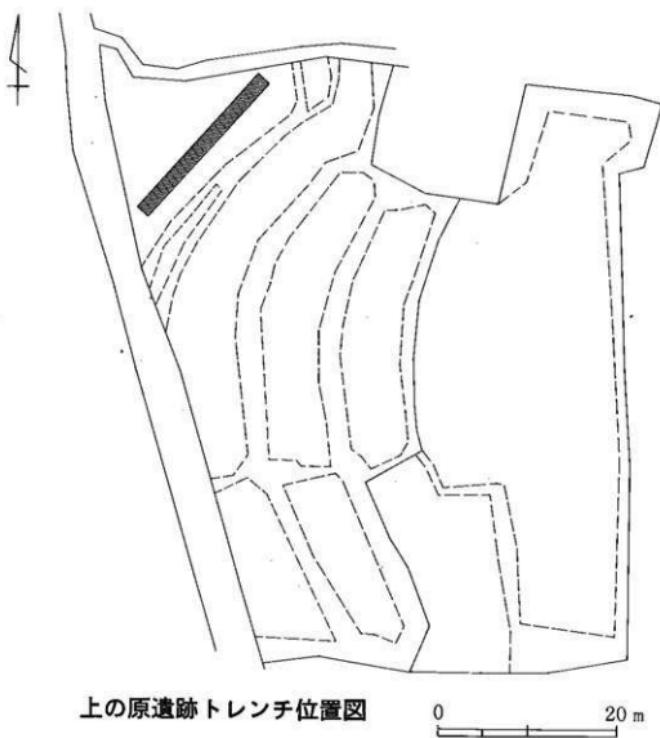
古瀬平遺構分布図

Ⅱ 上の原遺跡

飯田市中村809-1

位 置 茂都計川の右岸、二ツ山から尾根状に延びた台地上に抜がる包蔵地である。東に傾斜した地形を造成して小さな水田を耕作している。この台地の縁部には古墳が所在した記録はあるが、現在はその痕跡もない。茂都計川をはさんだ中村中平遺跡では飯田地方では珍しい繩文時代後期の遺構・遺物が確認されている。また、古墳時代の集落址もあり周囲に点在する古墳との関係が考えられる。

経 過 山沿いの斜面に小さな水田が点在している。いずれも湿地であり機械化には向かないものである。そこで、生産性の向上のために水田保全型簡易基盤整備事業を実施することとなった。現在地形に沿って東向きに階段状に5枚になっている小さなものを中央に土手を築き2枚に造成するため、一番高い部分は削平されることになる。
(吉川 豊)



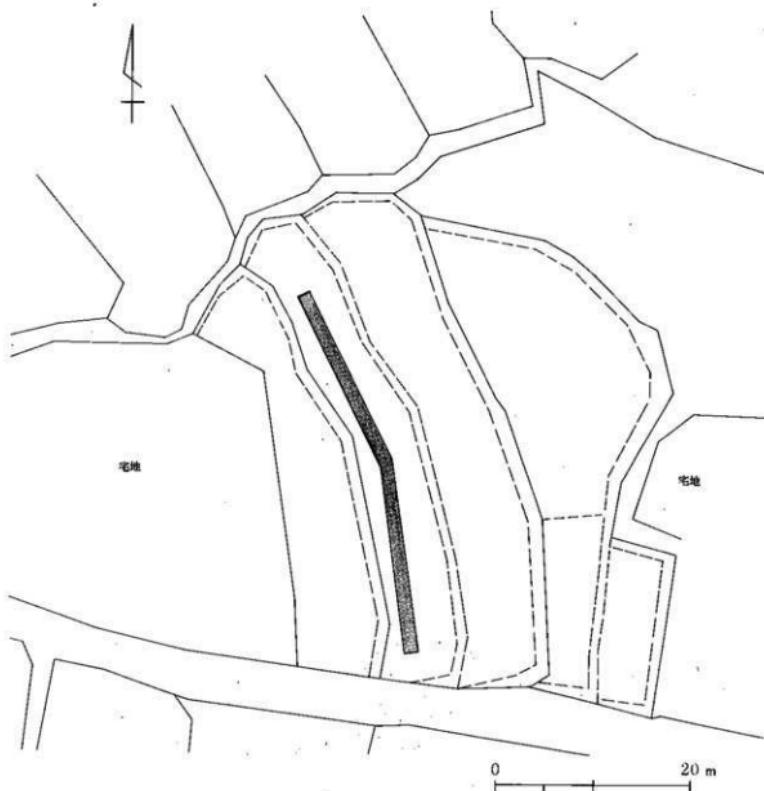
結果 削平される一番高い位置にある田圃に南北方向に幅1mのトレンチを設定し、ミニバックにより掘削した。耕土は約20cm程度であるが、南側では耕土下水分を含んだ粘質土が厚く堆積していた。基盤（地山）は礫を含む乳白色の粘土であるが、南側と北側では1m近い段差がある。以前に簡易な圃場整備が実施されたことによる地形の改変とみられる。

今回の調査では遺構・遺物の確認はなく、発掘調査は不要と判断した。（吉川 稔）

III 山本遺跡

飯田市山本1873-1他

山本地区トレンチ位置図



位 置 山本遺跡は中央アルプスの前山にあたる梨子野山・高島屋山などから広がる大扇状地上の米川と音沢川に挟まれた箇所に広がる包蔵地である。

今回の調査箇所は山本遺跡でも西方の山より、中沢川上流の右岸に位置する水田である。周辺では発掘調査等は行なわれていないため遺跡の性格は不明であるが、中世の寺院に関係すると見られる中御堂跡が米川沿いにあったとされる。

経 過 東向きの扇状地の扇頂に近い場所なため、地形は比較的急傾斜である。現在その地形に沿って3段に細長くなっている水田を、機械を入れるよう1枚に造成し直すため水田保全型簡易基盤整備事業を実施することになった。北側にあたる中沢川沿いでは既に基盤整備が終了しているが、この地点は今回の場所より一段低い湿地だった。

結 果 現在3枚になっているものを真中の水田の高さに揃えて一枚にするため、上段を削平し、下段に盛ることになる。そこで、上段の田圃に南北方向で幅1.5mのトレンチを設定し、重機を使用し地下の状況確認を実施した。その結果、耕土下40cmで石の入ったローム面が確認できた。ローム上への堆積は比較的薄く、一部に黒色土が10cm程度認められるだけであった。この黒色土はトレンチの両端へ向かうにつれ徐々に厚くなるものと見られる。地形的に尾根状に延びる台地の中央に道路があり、この地点が尾根の一番高い箇所で、さらに細長く東へ延びているものと見られる。

今回の試掘調査では遺構・遺物とも発見できなかった。居住域があるとすればここから南東に150mほど下った、南向きの傾斜地である中御堂跡付近が有力と見られる。
（吉川 豊）



試掘風景（上の原）

IV 鬼釜遺跡

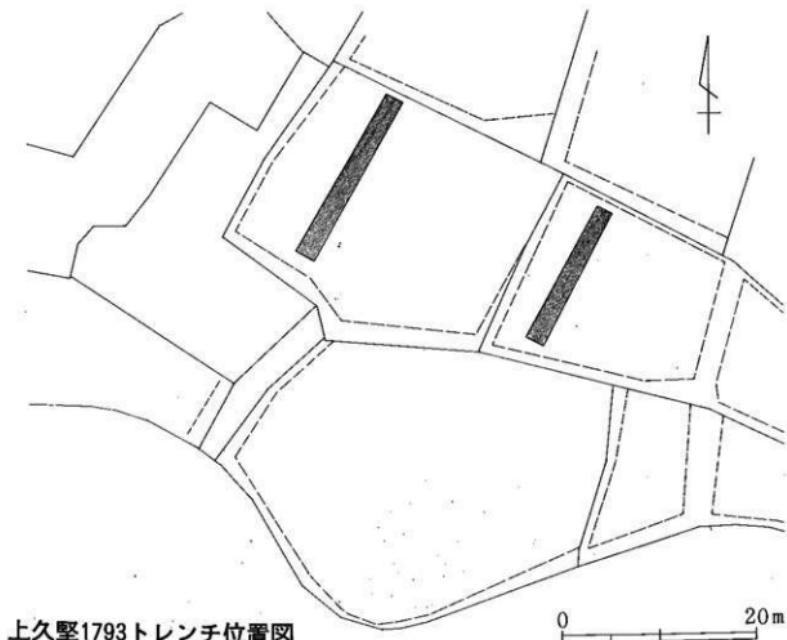
位 置 鬼釜遺跡が所在する上久堅地区は飯田市東部の山間地にある。そのほとんどが山地で人家は山の間を流れる河川が造ったわずかな平坦地と南向きの比較的傾斜の緩やかな場所に集まっている。

上久堅でも西よりに位置する鬼釜遺跡は玉川の左岸のほとんど平坦な段丘上に拡がり、南側には比高差30mほどで風張台地が平行して北西に延びている。遺跡範囲内には古墳が2基、寺院跡が4か所ある。そのほとんどが玉川側に所在しており、風張台地側は段丘崖直下の湿地が拡がるものとみられる。

周辺の調査としては、昨年度上平集会所付近の試掘調査を実施、トレンチの南よりに旧河川が確認でき崖直下の湿地説を裏付ける結果となった。

-1 飯田市上久堅1793他

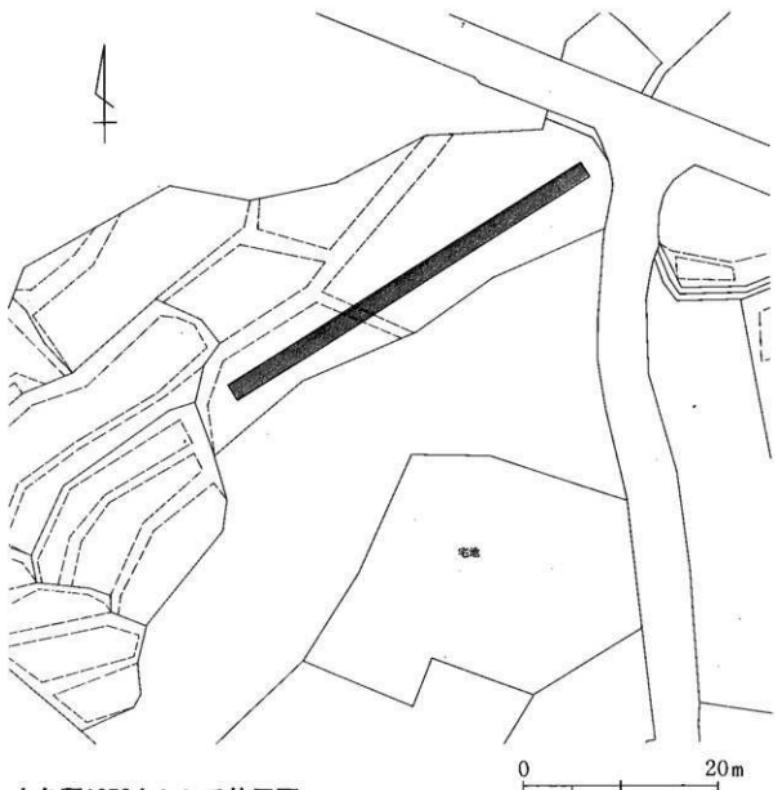
経 過 鬼釜遺跡の西端で風張台地直下の水田である。現在2段で耕作されているものを1枚にまとめる、水田保全型簡易基盤整備事業の実施が決まった。



結果 上下2段の水田に幅2mのトレンチを設定し、重機により掘削した。耕土下30cm程度で礫を含む砂があらわた。水流により運ばれ堆積したものと見られる。いつの時期かに段丘崖直下を川が流れていたと判断できる。安定した基盤（地山）は確認できなかつたため、調査不要とした。

-2 飯田市上久堅1973-1

経過 鬼釜遺跡の中央やや東よりで、段丘崖に近い北向きの斜面に位置する小さな水田5枚を1枚にまとめて、機械化をはかり生産性を上げるための事業である水田保全型簡易基盤整が計画された。

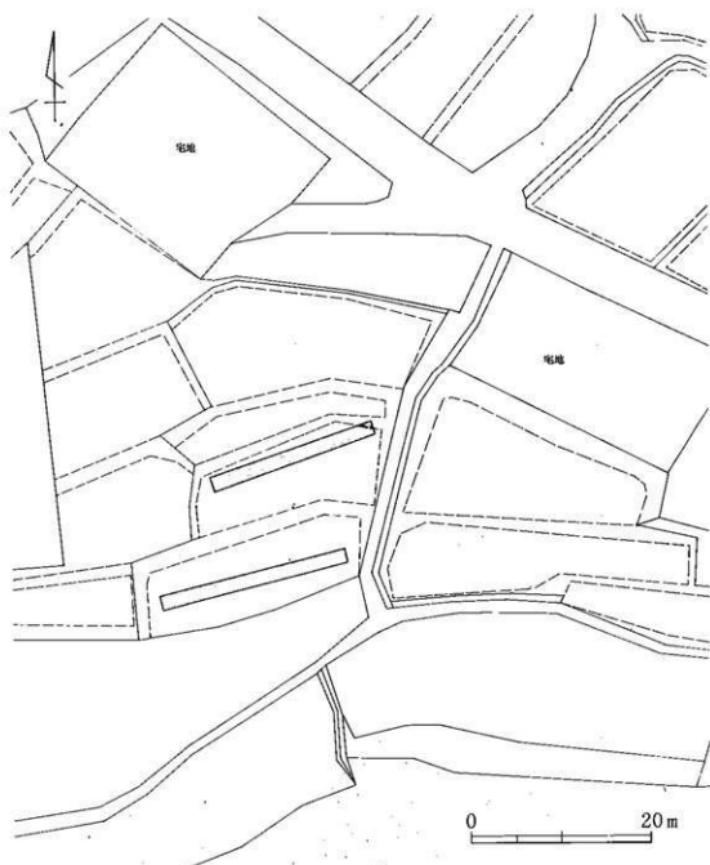


上久堅1973トレンチ位置図

結果 削平を予定している上段の水田に幅1mトレンチを設定し、重機により掘削をした。耕土直下に疊を含むローム面の連続はあったが、水分によりグライ化している。状況から段丘崖直下の湿地と判断できる。遺構・遺物は確認できなかったため、調査は不要とした。

-3 飯田市上久堅1997

経過 上平集落センターの南側に位置する水田であるが、急傾斜のため耕作できる面積は非常に狭い。そこで、水田保全型簡易基盤整備事業をで、機械化の促進と生産性の向上のために3枚の水田を2枚に造成しなおす計画を立てた。



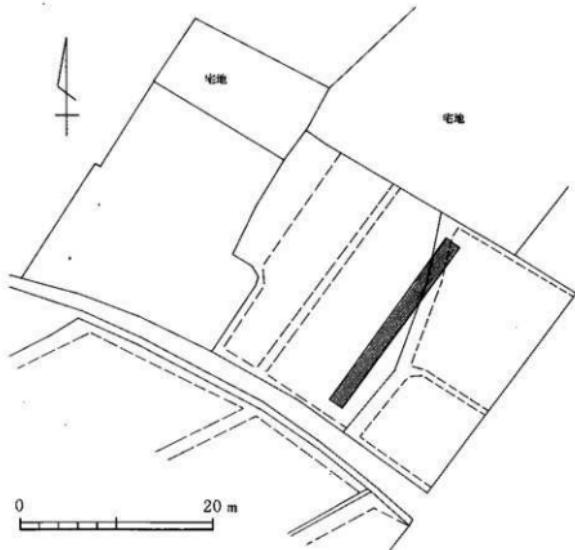
上久堅1997トレンチ位置図

結果 削平を予定する箇所に幅1m程度の試掘トレンチを設定し、重機により掘削した。急傾斜地であり、土の堆積は薄く耕土下約20cmからはロームが表れた。この地点は以前にも造成が行なわれたものとみて、斜面の切盛りの跡があった。しかし、遺構・遺物は確認できず試掘のみで終了とした。

-4 飯田市上久堅 2083-1・2085

経過 上久堅地区内に点在する知久氏18か寺のひとつである永福寺跡の隣地の水田である。比較的平坦地であるものの、この田圃は曲がった土手に囲まれた小規模なものであるため、生産性もあがっていない。そこで機械が導入できるように田圃を造成する水田保全型簡易基盤整備を実施することになった。

結果 上下2段になっている水田の中央付近に幅1.5mのトレンチを南西から北東へ向かって設定し重機により掘削、地下的状況を観察した。南西端のごく一部でローム面を確認したが、その他では耕土の下20cmに厚さ10cm程度の褐色粘質土があり、その下は水流による堆積とみられる細かな礫を含んだ砂があった。ある時期この箇所は川であったものと判断できたため、調査は不要とした。
(吉川 豊)



上久堅2083トレンチ位置図

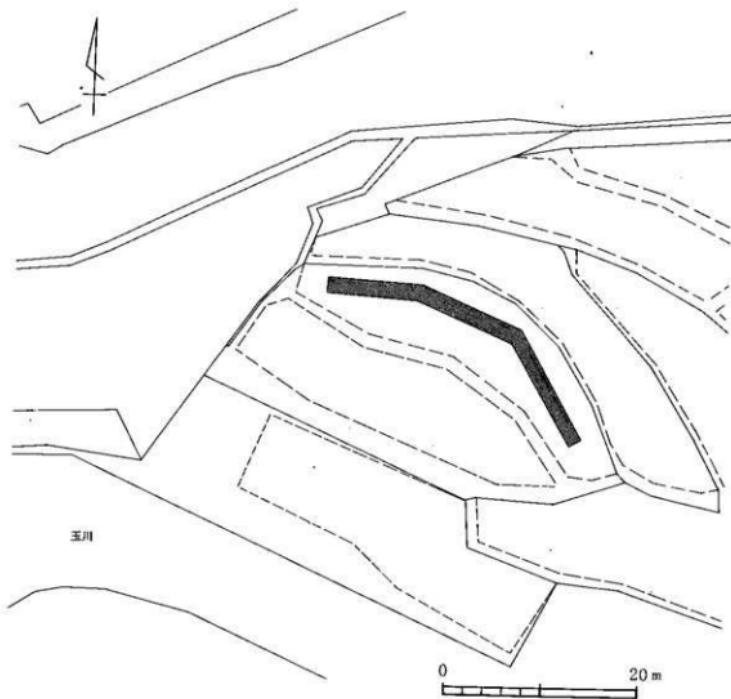
V 中宮原東遺跡

飯田市上久堅1715-2他

位 置 玉川の右岸段丘上で台地斜面には塚穴1号古墳・2号古墳の横穴式石室が所在する。

さらに、北側には撫文中期と古墳後期の集落が確認された北田遺跡がある。北田遺跡より一段低い箇所が今回の工事予定地である。

経 過 水田保全型簡易基盤整備事業の計画が持ち上がったが、天候等により概報入稿までに着手できなかった。



中宮原東遺跡 トレンチ位置

溝口の塚古墳
恒川遺跡群倉垣外遺跡
市内遺跡
平成9年度市内遺跡緊急調査概報

1998年3月発行

編集・発行 長野県飯田市上郷飯沼3145番地
飯田市教育委員会
印刷 有限会社 発光堂

